

「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」(11:4~7)

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) <u>ユダヤ教の三本柱</u> と 御子との比較	テーマ	1:1~3	
	<u>天使たちに優る御子</u>	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	<u>モーセに優る御子</u>	3:1~6	
	第二の警告 <u>アロンに優る御子</u> (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子) 注①	3:7~4:13 4:14~10:18	警告② 警告③ 5:11~6:20
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	旧約の信仰者たちの生き方を 手本とする	11:1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■「旧約の信仰者たちを手本とする」11章の構成

細目	内容	箇所
信仰の忍耐	信仰の特徴	1節
	このような生き方が可能であることを実証した人々がいる	2
	目に見えないものを確信する事例=天地創造	3
旧約の信仰者たち(時系列で)	族長時代以前	
	アベル	4
	エノク	5~6
	ノア	7
	族長たち	
	アブラハム	8~19
	イサク	20
	ヤコブ	21
	ヨセフ	22
	荒野の旅	
	モーセの両親	23
	モーセ	24~28
	イスラエル民族の人々	29~30
	ラハブ	31
試練の中で	イスラエル国史に見る信仰(士師たち・王たち・預言者たち)	32~34
	信仰は死を乗り越える	35~38
信仰の勝利		39~40

■ 前回の内容 信仰の忍耐 (11:1~3)

1. 1節 「信仰は」=信仰とは〜である。著者は、信仰の特徴について語る。
 - (1) 著者は、ここで「救いをもたらす信仰」について語っているのではない。
 - ① 救われた人が信仰を発揮するとき、その信仰はどのように働くのか
 - ② 信仰を持つと、将来のこと・目に見えないことに対してどう向き合うのか
2. 1節 信仰とは、「望んでいる事がらの保証」である
 - (1) 「望んでいること」=期待や希望をしていること。これらは、将来のこと。
 - (2) 「保証」**ギ**フポスタシス=本質 (1:3)・実質・保証、確信 (3:14)
 - (3) 将来のことは、信仰によって、確かなものとされる
 - ① 信者のすべての希望を伴う将来は、まだ実現していない。
 - ② よって、今の時点では、忍耐が必要であり、信仰の働きの第一は、忍耐である。
 - ③ 信仰者は忍んで耐えて、神の時が来ると、望んでいることを手に入れる。
3. 1節 信仰とは、「目に見えないものを確信させるもの」である
 - (1) 「目に見えないもの」
 - ① 物質界とは別の世界のこと、霊の世界のこと
 - ② 物質界のことでも、人が見たことのない過去のこと（その主要な例は、「天地創造」。3節で触れる）
 - ③ 今はまだ現れていない将来のこと。
 - (2) 「確信させるもの」**ギ**エレゴス=証拠・証明・保証、(客観的な証拠に基づく) 自信・確信・説得力
4. 信仰者が確信していることとは何か
 - ① 今は目に見えないが、しかし現在、現実として存在するもの
 - イエスが大祭司としての働きをしておられること
 - 信者は祈りにおいて神に近づくこと
 - 霊的成熟（信仰において前進するならば霊的に大人になること）
 - 罪の完全な赦し
 - ② 今は目に見えないが、しかし将来、現実として登場すること
 - メシアの再臨
 - メシアの王国
 - メシアの王国での信者の報いと地位
 - 永遠の秩序（新しい天と新しい地、天の都エルサレム (12:22)
5. 1節のまとめ
 - (1) 人が実際に経験している領域の外側にも、目に見えない現実の世界がある。
 - (2) そういう目に見えない現実の世界があることを証明し、保証するのが、信仰である。
 - (3) 「信仰者は、信仰によって生きる」とは、言い換えれば、「目に見えない現実の世界があることを証明するような生き方」である。
 - (4) 将来のこと、望んでいる事がらも目に見えないけれども、信仰者は、それらのことをすでに「現実である」と確信している。こういう生き方が、神に喜ばれる (6節「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。」)
6. 2節 こういう生き方が可能であることを、「昔の人々」、すなわち旧約聖書に記された聖徒たちは、自らの人生によって証明した。
 - (1) 「この信仰によって」 原文は「よって、そこに」

- ① 「そこに」とは、1節のまとめで説明したような信仰の捉え方を指す。
- ② 昔の人々は、そのような信仰をもって人生を送ったということ
- (2) 「称賛を受けました」 原文は「証人を得ました」
 - ① この文型は、受動態
 - 他の人々が、旧約の聖徒の人生の歩みを見ていた。すると、見ていた人の中から、「あの人の信仰はこのようであった」と証言する証人が登場した。・・・というようなニュアンスの文型。
 - 旧約の聖徒たちが、「自分の人生を通して、信仰者とはこう生きるのだと示そう。」といった目標をもって生きたわけではない。
 - ② 確かに彼らは、目に見えないことを、現実としてそれを見ているかのような生き方をした、と他の人から認められた。
 - ③ 誰が認めたのかは記されていないが、最終的には神。
7. 3節 目に見えないことは信仰によって受け取られる。そのことの代表的な事例は、「天地創造」である。
 - (1) 「創世記」は、モーセ五書のひとつ。しかし、天地創造のときには、モーセはもちろん、人間は誰一人目撃した者はいない。
 - (2) 神による天地創造があったとすれば、人は創造者なる神の存在を認めなければならない。生まれながらの人が天地創造を信じたくないのは、神を信じたくないからである。
 - (3) この世界は神の「ことば」によって造られた
 - ① 「この世界」=複数形英ages・・・物質界のみならず、その物質界が展開していく時間的要素も含み、「時代時代」とも訳せる。
 - ② 神の「ことば」ギレーマ=発音されたことば。
 - ③ 信仰者は創造を見てはいないが、それを信仰によって信じる。その基盤は、書かれたことば、聖書である。それがなければ、人はどのように天地創造がされたのか、知ることはできない(ヨブ 38:4)
 - (4) 信仰は未来に向かって目を向けるばかりではない。後ろをも振り返ることがある。
 - ① 天地は、神によって創造された、と信じる。
 - ② 天地創造は、神が存在することの証明である、と受け取る。
 - ③ よって、信仰者は、神を見たことはなくとも、神が存在することを信じる。
 - (5) 信仰が、過去にあって目に見えないことについて働くのなら、同様に、将来のことでまだ目に見えないことについても必ず働く。
 - ① 神の約束は、必ずそうなる。
 - ② 従って、今、信者に求められることは、信じて待つことである。
 - ③ 信仰の忍耐こそ、神の約束を受け取る条件である。

■ 本日の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」① (11:4~6)

手本となる生き方	内容	箇所
神の定めた方法によって、神に近づく	アベル (創 4:2~8、マタ 23:35)	4
神のことばを伝える。世からは拒絶される。しかし、神との交わりの中に憩う＝神と共に歩む、神に喜ばれる	エノク (創 5:21~24、ユダ 14~15)	5~6

1. アベル (4 節)

(1) 信仰によって、彼は、カインよりもよりすぐれた犠牲をささげた。

① カインは、「地の作物」(創 4:3) を持ってきた。

② アベルは、血の犠牲、「羊の初子の中から最上のもの」(創 4:4) を持ってきた。

- これが神に受け入れられたということは、神が要求したものだったから。
- 神の定めた方法によって、神に近づいたから。

(2) 創世記 4:2~8 → 3 節「ある時期になって」

① ☐ 原文を直訳すると、「ある一定期間の終わりに at the end of days」

② 次の 2 点が示されている。

- days 定期的に繰り返される、ある一定の期間があったこと
- at the end その期間の終わりの日に、捧げ物をしていたこと

③ 4:3 で記録された出来事は、捧げ物をするという点では、初めてのことでない。ある一定の期間が終わるごとに、繰り返されていた。

④ 今回初めてのことは、カインの捧げ物が受け入れられなかったこと。ということは、それまではカインも血の捧げ物をささげていたはずである。

⑤ カインは、今回初めて、羊をアベルから買わずに (作物と交換せずに)、自分で何を捧げ物とするかを決めて、地の作物を持ってきた。

(3) カインとアベルの対比

① カインは、神に近づくための道・方法は、自分で決められると考える人のタイプ。

② アベルは、神に近づくには、神が定めた道・方法を選ぶ人のタイプ。

(4) マタ 23:35 義人アベル

① 血の犠牲がアベルを義人にしたのではない。

② アベルを義人にしたのは、「神が言われたとおり、血の犠牲を持っていったときだけ、神に近づくことができる」と信じた信仰である。

③ その信仰を、実際に血の犠牲をささげることを通して表明した。

④ その表明によって、アベルは、自分が義人であることの「証人を得た」

⑤ 真の証人は、神である。神がアベルのための証人となってくださり、「神が、彼のささげ物を良い捧げ物だとあかししてくださった」(ヘブル 11:4)

(5) アベルの生き方と私たち新約の聖徒との関係

- ① キリストが十字架上でご自身を捧げられたのは、動物の犠牲よりもすぐれた、そして最終的な、一つの永遠の犠牲である（ヘブル 10:4~18）。
- ② 私たちは、キリストにあつて、神に近づくことができる者である（ヘブル 10:19~22）。
- ③ 紀元 30 年の聖霊降臨・教会誕生以来、これ以外に神に近づく方法はない。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」（使徒 4:12）。
- ④ 「神の定めた方法によって、神に近づく」という生き方をしたアベルは、私たち、新約時代の信仰者にとっても、重要な手本である。

2. エノク (5~6 節)

(1) 5 節

- ① エノクは、神に喜ばれる生き方を通して信仰を表明した。
- ② 信仰によって、エノクは死を見ることのないように移された。

(2) 創世記 5:21~24

- ① エノクは、神とともに歩んだ。
- ② 神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

(3) 「取られた」について

- ① II 列 2:10~11 10 節「取り去られる」同じヘブル語が使われている
- ② I テサ 4:17 「空中に引き上げられ」
- ③ I コリント 15:52 復活と変換
 - 死者は朽ちないものによみがえり・・・復活
 - 私たちは変えられる・・・・・・・・・・変換

(4) エノクは、「変換」を受けて、天に引きあげられた最初の人

- ① 次は、エリヤ (II 列 2:11)
- ② 三回目は、I テサ 4:16~17。
 - いつか? 「キリストにある死者」が復活するとき (I テサ 4:16)
 - 誰が? 「地上で生き残っている私たち」。「復活」ではなく、「変換」を受けて天に引きあげられる (I テサ 4:17)。

(5) I テサ 4:17 の「天に引き上げられること」(携挙)について

- ① I テサ 4:16~17 で、信者たちは、復活にせよ、変換にせよ、朽ちない栄光の体を受けて、天に引き上げられる。これを「携挙」と呼ぶ。
- ② 「復活」を受ける人々＝「キリストにある死者」(I テサ 4:16)・・・「キリストにある」という地位は、新約時代の聖徒の地位である。
 - 信仰を通し恵みによって救われ、同時に聖霊のバプテスマを受けて、目に見えない・キリストの体である「教会」に属することとなった信者である。時代としては、紀元 30 年の聖霊降臨以降。
 - この地位は、旧約時代の聖徒にはない。また、真の教会が携挙された後、【7 年の患難期と千年のメシア王国】の時期に信じて救われるであろう信者たちも、この地位にはあずからない。
 - よって、ここでの復活は、新約時代の聖徒だけが対象である。
- ③ 「変換」を受ける人々＝「地上で生き残っている私たち」(I テサ 4:17)・・・この信者たちは、旧約時代の聖徒たちではなく、明らかに新約時代の聖徒たちである。
- ④ 携挙にあずかる信者たちは、復活のグループも変換のグループも、ともに、新約時代の聖徒たちである。携挙は、目に見えないキリストの体である「教会」に属する信者たちだけが対象である。よって、「教会の携挙」と呼ぶこともある。

(6) 「携挙」と「再臨」の関係

- ① 携挙のとき、主イエス・キリストは、ご自身天から下って来られて空中で、教会の信者たちを迎えてくださる (I テサ 4:16)。
- ② I コリ 15:23 では、このときを「キリストの再臨のとき」と表現している。

- ③ 携挙の時点では、キリストは天から下って来られるが、地上に降り立つことはない。
- ④ キリストが地上までお帰りになるには、条件がある。
- 条件「イスラエル指導者層と民族全体がイエスをメシアとして認め、民族的な救いを受けて、イエスに帰って来てくださいと祈ること」
 - ホセア 5:15、マタイ 23:39
- ⑤ イスラエルの民族的救いとそれに続くキリストの地上への再臨は、大患難期の末期に起きる
- ホセア 6:1~3
 - ミカ 2:12~13
 - ハバクク 3:3、13
 - イザヤ 63:1~6)。
- ⑥ I コリ 15:23 が、携挙を「キリストの再臨」の中の出来事として位置づけている理由は、ユダの手紙 14 節から明らかとなる。(7) で詳しく見る。
- キリストが地上に再臨するときには、彼に属する聖徒たちを同行する。
 - キリストの再臨に同行する聖徒たちを招集するのが、携挙である。
- ⑦ 再臨には④の条件があるが、携挙については、条件はない。紀元 30 年の教会誕生以降、いつでも起こり得る。
- 「異邦人の完成のなる時」(ロマ 11:25)、すなわち、教会に属する異邦人信者の数が、神がお定めになった数に満ちたときに、携挙が起きる。
 - その時がいつかは、父なる神以外の誰も知らない(使徒 1:6~7、ここでは、携挙は、再臨とそれに続くメシア王国の建設につながる出来事として語られている)。
- (7) ユダの手紙 14~15 節
- ① エノクは、アダムから 7 代目
- ② エノクの預言、「主は千万の(彼に属する)聖徒たちを連れて来られる」
- ③ 主が来られる=主イエス・キリストの再臨
- ④ 千万の(彼に属する)聖徒たち=携挙によって天に引き上げられたキリストにある聖徒たち=新約時代の聖徒たち
- ⑤ 15 節 主の再臨の目的=三つ組
- すべての者にさばきを行う・・・この組の他の二つから「すべての者」とは、不信者すべてを指し、信者は含まれないことは明らかである。
 - 不敬虔な者たち(神なき者たち=不信者)が行った神なき行為のすべてを罰する。
 - 神なき罪人たちが主に言い逆らった無礼のすべてを罰する。
- ⑥ エノクは預言者であった。
- エノクは、神のことばを受けて、世に伝えた。
 - 世の反応は、「神なき者たち」(不信者たち)からのいろいろな行為やことばによる攻撃。また、人の目からは立派な行為であっても、神に対する信仰がなければ、それも神なき行為に含まれる。
 - そのような状況の中でも、エノクは 300 年間、「神とともに歩んだ」(創世記 5:22)

(8) 歩む^ヘハウラク

- ① 創3:8で、神がエデンの園を「歩き回られる」と同じことば。仲間、友達付き合い、交流、といった意味を含む。
- ② エノクは、神と交わりをもっていた。
 - 信仰を通して恵みによって救いを受けていた。
 - 神のことばを喜び、人々にそれを伝えた。彼は預言者として、信仰による義を教えた。しかし、世の反応は、神なき行為やことば、すなわち不信仰な行為やことば。
 - エノクは、その状況の中でも、300年間、神との交わりの中で、礼拝し、祈り、そこから平安と慰めと力を受け続けた。自分の能力や意志に頼る人生ではなく、神とともに歩む人生であった。
 - この生き方が、神に喜ばれる生き方である。

(9) ヘブル 11:6 「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」という原則

- ① エノクは、神に喜ばれた。それは、エノクに信仰があったからである。
- ② 神に近づこうとする者は、二つのことを信じなければならない。
- ③ 第一：神が存在するということ
 - これは信仰への第一のステップである。
- ④ 第二：神を求める者には、神は報いてくださる方であること。
 - 「求める」^ギエクゼテオウ＝真剣に求める、探し出す
 - 「神は、報いを与えてくださる方になる^英become」

■ 次回の内容

「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」②(11:7)、ノアを扱います。

創世記6章から11章を学ぶと、ノアの時代、洪水のさばきを経て生き残った人類は、ノアとその家族、全員で8名だけであったことが分かります。現代の人類は皆、ノアの子孫であり、ノアの3人の息子、セム、ハム、ヤペテを先祖としています。私たち日本人のルーツは、誰でしょうか。そのようなトピックにも触れながら、ノアの信仰の人生とその時代的背景をたどります。